



手術技術の進歩と集学的治療 数多くの臨床試験への取り組みで 膵臓がんの治療成績向上に貢献

がんの中でも治療成績が悪く、世界的にも罹患数が増えている膵臓がん。治療成績を上げるために日々挑戦を続ける松本教授にお話をうかがった。

技術の進歩や集学的治療で 治療成績が確実に進歩

かつては不治の病とされてきた膵臓がん。手術が難しく効果的な薬もない状況で、術後の合併症等で亡くなる患者も多かった。そんな難易度の高い膵臓がん治療に真摯に向き合ってきたのが、近畿大学病院の松本教授だ。「膵臓がんの治療は、以前と比べて随分進歩してきています。ロボット手術の導入も含めた技術の進歩に加えて、診療科や部門を超えたチームワークによる集学的治療、臨床試験への積極的な参加がその要因です」。松本教授を中心とする同院の膵臓がん手術の症例数は、近畿圏で有数の実績を誇る。



外科・内科・医療スタッフが集まり、朝早くからカンファレンスを実施。患者一人ひとりの治療方針を検討している。

患者一人ひとりに適した オーダーメイドの治療を

「手術が難しい患者さんに対しては、抗がん剤を1年近く投与してから手術を実施。あまり進行していない場合は腹腔鏡やロボット手術で傷を小さくすることで、術後の糖尿病を予防するなど、一人ひとりに適したオーダーメイドの治療を行っています」と話す松本教授は、患者への説明も複数回丁寧に行い、術後の抗がん剤治療や栄養療法についても糖尿病内科や栄養士と連携しながらフォローアップに余念が無い。「膵臓がん治療は近年確実に成績が良くなっていますので、お気軽にご相談ください」。



1.膵臓がんには有効な検診方法がなく、慢性膵炎などリスクが高い患者への治療にチームで取り組んでいる。
2.高難度の膵頭十二指腸切除術においても、ロボット手術が可能になった。



近畿大学病院

松本 逸平 外科 肝胆膵部門 主任教授



松本教授は、膵臓がん治療に対して、抗がん剤と外科治療を組み合わせた臨床試験を数多く実施。